

〈研究・調査報告〉

「非言語コミュニケーション」のイメージ変容 — 「言語・非言語コミュニケーション論」の実践報告 —

鈴木 一 徳

【要旨】

本報告は、2025年度S1クォーターに開講した「言語・非言語コミュニケーション論」の授業実践報告である。受講前後の「非言語コミュニケーション」に関するイメージを比較することで、授業内容の定着度に加えて、「非言語コミュニケーション」に対する無意識的なステレオタイプの抽出を試みる。テキストマイニングを行った結果、受講前後で「非言語コミュニケーション」に対するイメージが変化していることが分かった。この結果を受けて、「非言語コミュニケーションとは何か」を体験的に学び、自身の無意識的な非言語コミュニケーションをメタな視点から分析することが重要であることを述べた。

キーワード：言語・非言語コミュニケーション、イメージ変容、テキストマイニング、授業実践報告

1. はじめに

本報告は、2025年度S1クォーターに開講した「言語・非言語コミュニケーション論」（以下、本科目）の授業実践報告である。鈴木（2024）では、本科目の具体的な教授内容や授業運営上の工夫について紹介した。本稿では特に、受講生が有する「非言語コミュニケーション」に関するイメージを可視化することを目的としている。受講前および受講後の「非言語コミュニケーション」に関するイメージを比較することで、授業内容の定着度に加えて、「非言語コミュニケーション」に対する無意識的なステレオタイプを抽出することができる考える。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、本科目の授業概要および2025年度の受講者情報について述べる。第3節では、受講前の「非言語コミュニケーション」に対するイメージの分析を行い、第4節では、受講後の「非言語コミュニケーション」に対するイメージの分析を行う。そして、第5節でまとめを述べる。

2. 授業概要

本科目は、国際人文学部国際交流学科の専門科目であり、履修可能年次は2年次とされている。日本語教員養成課程（副専攻）修了のための選択必修科目でもあるため、国際文化学科の学生も履修可能である。国際交流学科においては、専門科目群Ⅱ（国際コミュニケーション）の選択必修科目にも位置付けられている。シラバスで公開している本科目の授業概要は以下の通りである。

対人コミュニケーションでは、ことばを用いた言語的メッセージの他に、外見的特徴、身体動作、表情行動、視線行動、空間行動、接触行動、接近行動、文化的背景など、様々な非言語的メッセージが用いられます。本授業では、特に非言語コミュニケーションに関する現象・概念を考察し、実際のコミュニケーションの内省・分析を行い、非言語コミュニケーションの重要性及び対人コミュニケーションの機能を明らかにします。授業ではペアまたはグループでのディスカッションを毎回行うので、積極的な参加が求められます。

2025年度は合計で34名の履修登録があり、その内訳は、国際交流学科28名（うち交換留学生2名）、国際文化学科6名（うち交換留学生3名）であった。学科および学年の内訳を表1に示す。

表1 履修者の内訳

	国際交流学科	国際文化学科	合計
2年生	1	1	2
3年生	17	0	17
4年生	8	2	10
交換留学生	2	3	5
合計	28	6	34

本科目は全体で13回の講義から構成されている。第1回から第3回にかけては、受講にあたって理解しておくべき基本的な用語やその定義、さらに具体的な事例を紹介しながら、各論に進むための基礎的な準備を整えることに重点を置いた。この段階では、専門的な内容に入る前に、学習者が必要な知識を共有し、共通の理解を形成することを目的としている。

続く第4回から第12回では、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの両方に関連する幅広いテーマを取り上げ、それぞれの特徴や役割、実際の場面での応用について詳しく学習した。これらの回では、理論的な説明に加えて、具体的な事例や演習を通じて理解を深める構成となっている。

さらに、第13回は総括の位置づけとして、期末試験に向けた演習を実施した。この演習では、これまで学んだ内容を総合的に確認し、試験に備えるための実践的な準備を行った。その後、次の回において筆記形式による期末試験を実施し、学習成果を評価した。なお、各回で

扱った具体的な内容は、表2に示している通りである。

表2 授業内容（シラバス）

授業回	内容
第1回	「言語」「非言語」「コミュニケーション」
第2回	「言語コミュニケーション」と「非言語コミュニケーション」
第3回	非言語コミュニケーションの種類・特性・機能
第4回	外見的特徴：身体、身なり、魅力
第5回	身体動作：ジェスチャー、ボディ・ランゲージ
第6回	表情行動：顔面表情、感情表出
第7回	視線行動：視線行動の属性・機能、アイコンタクト
第8回	音声行動：音声行動の分類、周辺言語、ターン相互作用、沈黙、感情表出
第9回	空間行動：空間行動の分類、個人空間、対人距離、テリトリー
第10回	接触行動：接触行動の分類、接触とコミュニケーション
第11回	接近行動：接近行動の分類、言語的・非言語的接近性、コミュニケーションスタイル
第12回	非言語コミュニケーションと文化
第13回	総括
	期末試験

本科目では教科書としてヴァーガス（1987）を指定し、毎回の予習として教科書の指定範囲を読み、内容把握および疑問点の整理をすることを促した。

3. 「非言語コミュニケーション」のイメージ（受講前）

本科目の受講者に対して、振り返り課題の中に「本授業を受講する前に考えていた『非言語コミュニケーション』とはどのようなものかと思っていたか、具体的に書いてください」という設問を設け、自由記述形式で回答してもらった。有効回答数は27件であり、受講者の79.4%からの回答が得られた。

回答はテキストマイニングのソフトウェアであるKH Coderを用いて分析を行った（樋口、2020）。本稿で使用したKH Coderは、オフィシャルパッケージの3.03aというバージョンであった。テキストの下処理をした結果、総抽出語数は755、異なり語数は194であった。

3.1 抽出語リスト

表3は、テキストから名詞を抽出し、出現回数順に並べ替えたものである。「コミュニケーション」が15件で最も頻度が高く、「言語」（14件）、「ジェスチャー」（13件）、「言葉」（11件）、「表情」（6件）、「手段」（5件）と続いた。

表3 受講前の抽出語リスト（出現回数順）

順位	抽出語	出現回数
1	コミュニケーション	15
2	言語	14
3	ジェスチャー	13
4	言葉	11
5	表情	6
6	手段	5
7	気持ち 相手 表現	4
8	自分 手振り 手話 授業 文化	3
9	アイコンタクト 意思 感情 受講 身振り 身体 人 疎通 動作 内容 部分 目	2
10	お辞儀 お礼 トーン 意図 意味 音 会話 解釈 顔 期限 距離 興味 具体 形 口 考え 行動 講義 仕草 姿勢 肢体 視線 手 種類 場面 振り 世界 性格 声 声色 接触 相槌 存在 体 探求 動き 特徴 二 の次 認知 判断 勉強 補助 補足 密接 予想 要素 力	1

3.2 共起ネットワーク

語と語の結びつきの強さや、語の共起関係を見るために、共起ネットワーク分析を行った。図1にその結果を示す。

「コミュニケーション」と「言語」の結びつきが最も強く、他には、「身振り」「手振り」「身体」「相手」「感情」「表情」「自分」「部分」の共起関係も確認された。

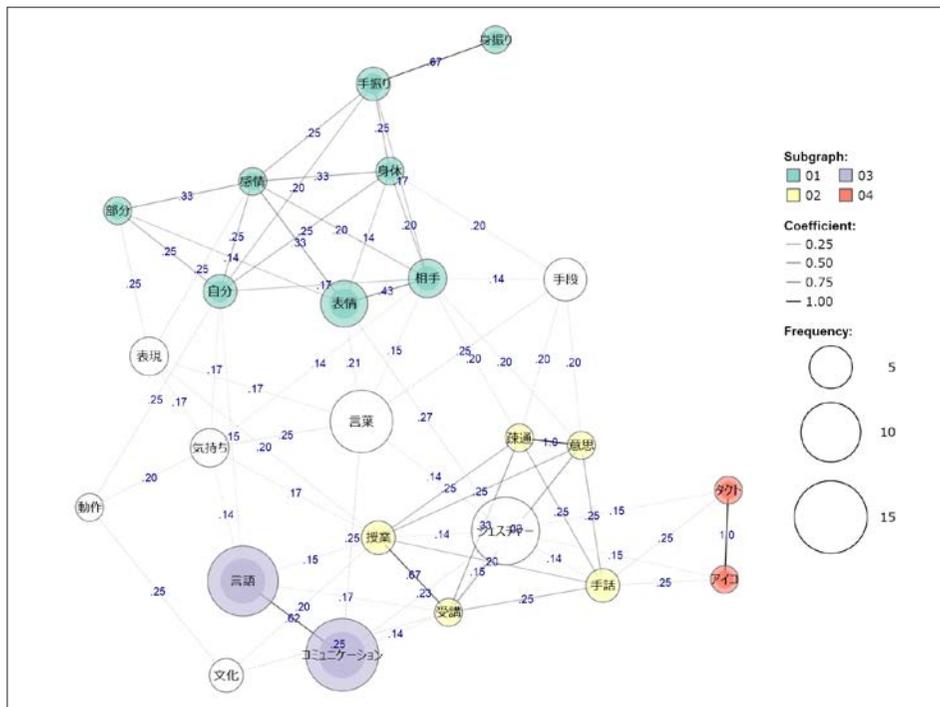


図1 受講前の共起ネットワーク

3.3 具体的な回答例

受講前の「非言語コミュニケーション」についての具体的な回答の例を表4に示す。多くの受講者が、「非言語コミュニケーション」は、「ジェスチャー」「身振り手振り」「二の次」「補助的」という認識をしていたことが窺える。

表4 受講前の具体的な回答例

ほとんどはジェスチャーと表情だけだと思いました。
言語を交わさないでジェスチャーだけでコミュニケーションを取るもの。
身振り手振りといったジェスチャーだけのコミュニケーションだと考えていた。
頷くような、会話中に出てくる動作で、文化的なもの。
ジェスチャーや相槌など目に見えやすいものの起源や文化差。
言語的コミュニケーションが大切で非言語的コミュニケーションは二の次だと思っていた。
表情やジェスチャーなど言葉を使わない補助的な手段だと思っていた。

4. 「非言語コミュニケーション」のイメージ（受講後）

本科目の受講者に対して、振り返り課題の中に「本授業の受講を経て、『非言語コミュニケーション』とはどのようなものであると考えるか、具体的に書いてください」という設問を設け、自由記述形式で回答してもらった。有効回答数は27件であり、受講者の79.4%からの回答が得られた。

受講前と同様にKH Coderを用いてテキストの下処理を実施した結果、総抽出語数は1,589、異なり語数は348であり、いずれも受講前を上回っていた。この結果は、受講後の「非言語コミュニケーション」について、受講前よりも質的にも量的にも充実した回答がなされていることを示している。

4.1 抽出語リスト

表5は、テキストから名詞を抽出し、出現回数順に並べ替えたものである。「言語」が42件で最も頻度が高く、「コミュニケーション」(30件)、「相手」(13件)、「ジェスチャー」(11件)、「手段」「声」(各9件)、「受講」(8件)、「距離」「身体」(各7件)、「トーン」「意味」「視線」「情報」「動作」(各6件)と続いた。

受講前の抽出語には出現しなかったものとして、「沈黙」、「空間」、「接近」、「外見」、「角度」、「臭い」、「色」、「速度」などがあり、授業内容を体験的に理解することで、「非言語コミュニケーション」に対するイメージが変容している様子が窺える。

表 5 受講後の抽出語リスト（出現回数順）

順位	抽出語	出現回数
1	言語	42
2	コミュニケーション	30
3	相手	13
4	ジェスチャー	11
5	表情	10
6	手段 声	9
7	受講	8
8	距離 身体	7
9	トーン 意味 視線 情報 動作	6
10	言葉 接触 部分	5
11	ことば 会話 顔 気持ち 姿勢 授業 人間 沈黙 伝達 表現 理解	4
12	お辞儀 メッセージ 共有 行動 使い方 状態 心理 人 生活 体 動き 方法	3
13	アイコンタクト 一種 学習 間 空間 仕草 自分 身振り 接近 相違 服装 文化 補助 目 役割 要素	2
14	コントロール シェイプ スピード ツール パーツ ピッチ ボディ・ランゲージ 意思 意識 意図 影響 解読 外見 角度 活用 感覚 感情 環境 関係 関与 機能 空気 嫌味 口 合図 差 参加 視覚 自身 実感 手話 受け取り 週間 習得 臭い 場 色 信頼 侵入 心情 身だしなみ 身なり 成立 正装 生き物 生得 誠意 潜在 前進 相槌 側面 速度 存在 他者 对人的 特徴 内容 肉体 日常 能動 発生 範囲 部位 変化 変動 補足 本当 類似 話し相手	1

4. 2 共起ネットワーク

語と語の結びつきの強さや、語の共起関係を見るために、共起ネットワーク分析を行った。図2にその結果を示す。

「コミュニケーション」「言語」「手段」の結びつきが最も強く、他には、「沈黙」「距離」「身体」「姿勢」「トーン」「表情」「視線」「ジェスチャー」の共起関係も確認された。図1（受講前）と比較してみると、図2（受講後）の方が、より複雑なネットワークが形成されていることが分かる。

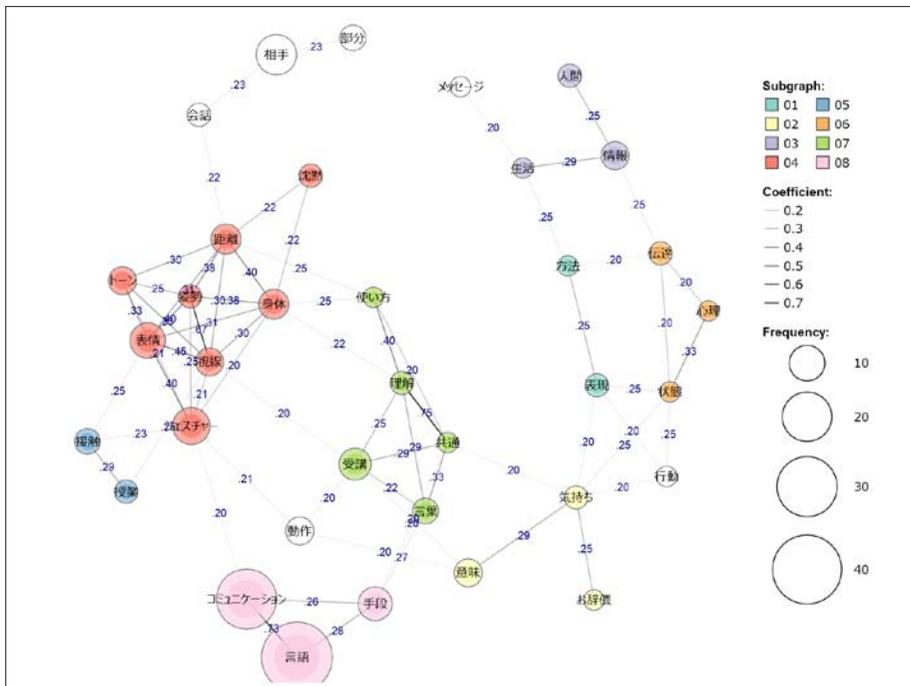


図2 受講後の共起ネットワーク

4.3 具体的な回答例

受講後の「非言語コミュニケーション」についての具体的な回答の例を表6に示す。多くの受講者が、「非言語コミュニケーション」は、「ジェスチャー」「身振り手振り」という認識だけでなく、「音声的要素（トーン、ピッチ、スピード）」や「接近性」、さらには「沈黙」など、より深いレベルの認識を示していた。

表6 受講後の具体的な回答例

体、声のトーン、ピッチ、身なり、接触、接近性、アイコンタクトなども入る。
表情・視線・ジェスチャー・姿勢・身体・距離・声のトーンや話すスピードなど、言葉を使わないさまざまな手段によって成立するコミュニケーションである。
ジェスチャー以外に会話の中で生まれる沈黙も非言語コミュニケーションである。
ジェスチャーなどの手の動きだけでなく、表情、視覚などの顔の部位の働き、外見的特徴、接触や接近などの声以外の生き物の動きで読み取ることができるもの。
相手に対して自然と現れる一種の表現であり、言語化できない部分を全身で表すことができるもの。
非言語メッセージの解釈法は何も意識的に習得したものではないから、言語より信頼される。
身体の動きやフィラーも非言語コミュニケーションと見なせる。
相手との会話の中で発生する表情やピッチの変化だけでなく、相手との距離感やテリトリーへの侵入など身体的な部分でも行われているもの。相手との親密性によって表現方法が変わるもの。

5. まとめ

本報告は、筆者が担当している「言語・非言語コミュニケーション論」における、受講前後での受講者の「非言語コミュニケーション」に対するイメージの変容をまとめたものである。円滑なコミュニケーションをするためには、言語能力の向上だけでは不十分である。そのため、「非言語コミュニケーションとは何か」を体験的に学び、自身の無意識的な非言語コミュニケーションをメタな視点から分析することが重要である。本科目がそのきっかけになれば幸甚である。

【参考文献】

- ヴァーガス, マジョリー F. (石丸正・訳) (1987) 『非言語コミュニケーション』 新潮社.
- 鈴木一徳 (2024) 「非言語を言語化する—『言語・非言語コミュニケーション論』の実践報告—」『JIU 日本語教育実践報告集』第5号, 29-35. 城西国際大学日本語教育研究会.
- 樋口耕一 (2020) 『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— (第2版)』ナカニシヤ出版.

The Image of “Nonverbal Communication”: A Practical Report on “Verbal and Nonverbal Communication”

Kazunori Suzuki

Abstract

This practical report details the teaching practices of the course “Verbal and Nonverbal Communication”, offered in the Spring 2025. By comparing students’ perceptions of “nonverbal communication” before and after the course, this study attempts to assess the retention of course content and extract unconscious stereotypes regarding “nonverbal communication.” Text mining techniques revealed that perceptions of “nonverbal communication” changed between pre- and post-course periods. Consequently, the report emphasizes the importance of experientially learning “what nonverbal communication is” and analyzing one’s own unconscious nonverbal communication from a meta-perspective.

Keywords: Verbal and Nonverbal Communication, Image Transformation, Text Mining, Practical Report